

保育に関するテキストにおける幼児の表現の とらえ方について

栗原 泰子

A Study of Definitions of Children's Expression in Textbooks of Early Childhood Care and Education

Yasuko KURIHARA

要 約

本研究においては、保育内容領域「表現」に関するテキストをとりあげ、幼児教育界における幼児の表現に関する理論的なとらえられ方についての検討を行った。その結果、表現をとらえる際の視点の置き方から、(1)「表出」と「表現」(「再現」)、(2)「感性」と「表現」、(3)「コミュニケーション」の3つに分類されることが明らかになった。

Key Words: Expression, Children's Expression, Early Childhood, Care and Education

1. はじめに

昭和22年3月に制定された「学校教育法」によって、幼稚園教育は、法的には学校教育体系の中に位置付けられた(第1条)。¹⁾同法において、幼稚園の目的は、「幼稚園は、幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」(第77条)と規定され、またその目標は「幼稚園は、前条の目的を実現するために、次の各号に掲げる目標の達成に努めなければならない。1 健康、安全で幸福な生活のために必要な日常の習慣を養い、身体諸機能の調和的発達を図ること。2 園内において、集団生活を体験させ、喜んでこれに参加する態度と協同、自主及び自律の精神を養うこと。3 身辺の社会生活及び事象に対する正しい理解と態度の芽生えを養うこと。4 言語の使い方を正しく導き、童話、絵本等に対する興味を養うこと。5 音楽、遊戯、絵画その他の方法により、創作的表現に対する興味を養うこと。」(第78条)そして保育内容については、「幼稚園の保育内容に関する事項は、前2条

の規定に従い、監督庁が、これを定める。」(第79条)となっている。

このように学校の1種として、教育機関として位置付けられているにもかかわらず、一般的にはそのような認識がなされていない状況もある。例えば、テレビドラマや、ニュースでさえも「〇〇幼稚園」という表札の映っている幼稚園の映像を流しながら、アナウンサーは「保育園」と言ったり、「幼稚園の保母さん」というような言葉が使用されたりする、というようなことが日常的にみられるのである。他方幼稚園や保育所の現場においても「保育」という言葉が日常的に使われている。これは、法的に規定されていることから、単に教育という面だけではなく、それに保護育成というような意味合いを込めて、他の学校の教育活動とは異なる性格付けをしていることによるものである。

幼稚園の現場においても、「教育」という言葉を「保育」という言葉で置き換えることにより、積極的な指導、あるいは教授を行わずに、子どもの活動を中心に教育活動を考えていくことが容易になるであろう。「保育」という概念で幼稚園教育をとらえることによって、幼稚園教師は子どもを中心に保育を考え、日常の保育が展開していくことになる。具体的には幼稚園教師は、子どもの状況を理解し、子どもの興味や欲求に即した環境の用意や援助を行うことになる。保育内容については、5つの領域がそれを考える際の視点となるが、あくまでも子どもの遊びがその中心に据えられている。このように子どもの生活そのもの遊びそのものが保育をする際に教師に大きな影響を与えている。しかし、ここで考えなければならないのは、このような幼稚園教育の実践的な面に、教師の関心が集中してしまうことの問題点についてである。つまり、子どもがどのような活動を展開するか、そのために教師は何をしてあげたらよいかという点に関心が向けられているのである。

幼稚園教育を考える場合に、子どもの活動の背景にある、保育内容の基盤となっている理論的背景、あるいは哲学ともいべきものについて検討されることは必要である。幼児教育においても教育学や心理学の分野の理論は重視されているように思う。しかし、保育内容の5つの領域ごとの理論的な研究はまだまだ為される余地があると感じる。保育内容領域は、子どもの生活(遊び)を教師がとらえるための視点であり、そのとらえ方は総合的でなければならないだろう。しかし、それぞれの領域に関連する学問分野からの理論的な援用も必要となるであろうし、それとは別に、それらは学際的になされるべきであろう。

私はこれまで、「表現」をとりあげて、学生のもつイメージ、幼稚園教育における「表現」概念について、法的なものの検討とともに、語義的な検討を行ってきた。²⁾今回は、保育に関するテキストにおける「表現」のとらえ方についての検討を行うこととする。

2. 研究目的

本研究においては、保育内容領域「表現」に関するテキストを取り上げ、幼児教育界における幼児の表現に関する理論的などえられ方について、検討を行うことを目的とする。

3. 研究方法

(1) 分析対象

幼稚園教育の保育内容領域表現に関するテキスト（活動例や実践記録などは省く）で、「幼稚園教育要領」の改訂された1989年以降出版されたもの。本の題名に「表現」という言葉が使われているもの。

分析に使用したテキストは、以下の23冊である。

- (1) 黒川健一・小林美実編『保育内容 表現』, 建帛社: 1989. 9. 1
- (2) 花篤實・山田直行・岡一夫編『表現—絵画, 製作・造形—<理論編>』三晃書房: 1990. 1. 10
- (3) 角尾稔・小林美実・林建造・清水俊夫編『領域表現』同文書院: 1990. 3. 12
- (4) 黒川健一・小林美実『表現』東京書籍: 1990. 4. 10
- (5) 下田和男・西村政一『幼児の音楽と表現』 建帛社: 1990. 4. 20
- (6) 黒川健一監修『表現』ひかりのくに: 1990. 5
- (7) 幼児の活動研究会編『表現 感性と表現に関する領域』チャイルド本社: 1990. 8. 30
- (8) 村内哲二編『保育内容 造形表現の指導』建帛社: 1991. 4. 1
- (9) 皆本二三江編『0歳からの表現・造形』文化書房博文社: 1991. 4. 20
- (10) 藤善瑞子・川村晴子・三木孝子・小林光子『こどものための動きの表現』不昧堂: 1991. 4. 23
- (11) 大畑祥子編『保育内容 音楽表現』建帛社: 1991. 7. 10
- (12) 大沢巧一郎『表現活動のアイデア』明治図書: 1991. 8
- (13) 高杉自子監修『イメージと表現--感性と表現』チャイルド本社: 1992. 5. 1
- (14) 林建造他『保育の中の造形表現』サクラクレパス出版部: 1992. 6. 30
- (15) 大塚忠剛編『保育研究領域表現』北大路書房: 1992. 9. 30
- (16) 藤江充・梅澤由紀子編『表現』福村出版: 1993. 2. 10
- (17) 岡田陽『子どもの表現活動』玉川大学出版部: 1994. 7. 1

- (18) 須藤鶴子『幼児の表現を育てる』文化書房博文社：1995. 3. 15
- (19) 荒木紫乃編『表現－幼児と音楽－』文化書房博文社：1995. 4. 10
- (20) 高橋和子『表現－風の卵がころがったとき－』不昧堂：1995. 6. 10
- (21) 大場幸夫『表現原論－幼児の「あらし」と領域「表現」』萌文書林：1996. 8. 8
- (22) 高杉自子・森上史朗監修『保育内容表現』光生館：1996. 12. 20
- (23) 桶谷弘美・斉藤正義他『[音楽表現]の理論と実際』音楽之友社：1997. 6. 20

(2) 分析方法

表現について理論的に記述された部分を抽出し、そのとらえ方について、その視点の置き方を中心にその記述内容を分析する。

4. 結果及び考察

今回収集したテキストのうち、表現に関する理論的な記述が見出されたものは、17冊(74%)であった。書名に「表現」という言葉を使用していることから、表現については、何らかの記述がみられるのが当然であると思われるが、ここにも、幼児教育において、概念や理論的な検討が軽視されている状況を読みとることが可能である。また、執筆者が明記されていないものが1冊あった。

表現のとらえ方については、その視点の置き方からいくつかに分類することができた。私は、それを「表出－表現」という表現方法の違いによるもの。「感性－表現」という表現の導因となるもの。「コミュニケーション」という伝達に重点をおいたもの。以上の3つの分類項目を設定した。

以下に、それらの視点ごとに論じられている「表現」についてまとめてみる。そして、共通して見いだされる幼児の表現のとらえ方について論じることにする。

(1) 「表出」と「表現」(「再現」)

－行為として表現をとらえる－

今回分析の対象とした17冊のテキストのうち12冊(70.6%)のテキストにみられる視点である。「表現」を行為の過程としてとらえ、この行為の中に「表出」と「表現」という2つの層を含んでいるというとらえ方である。つまり、「表出」(expression)は幼児の内側にあるものを行為として外側に「表し出す」ことであるというとらえ方である。そして「表現」(representation)は、その行為の中に何らかのメッセージを含み、それを伝える相手を想定して行

保育に関するテキストにおける幼児の表現のとらえ方について

表1 テキストにおける「表現」のとらえ方

No. 執筆者	表出表現	感性表現	コミュニケーション	「表現」についての記述	その他のキーワード
1 黒川 健一	○		○	表現というのは、自分の内部にあるものを外部に表し出すこと、もう少し具体的に言えば、自分が心の中で感じること・思うことを、心の外の何かに置き換えて表し示すことである。心の中で感じること・思うことを何かの媒体に託して象徴させることだといっている。	・心の象徴化 ・日常生活行為
3 林 建造	○		○	私たちが現在生きている、そのうちなる思いを描き、それらを何らかの方法で他人に伝達を目標として外に表すという目的的な活動です。	・「表」と「現」 ・自己表出 ・自己表現
4 小林 美実		○	○	表現とは、表すことが意識された知性を伴う行為、行動、活動なのである。	
5 下田 和男	○			表現とは、内なる感情を外に表すことである。それは、自分の感じたことや考えたことを、さまざまな手段や方法を用いて自分以外の者にも感じとれるような形に置き換える行為である。	・内なる感情 ・表出表現
6 黒川 健一		○	○	私たちは、物事と触れ合う中で感じたこと・考えたことや、何かの折りにふと胸をよぎるおもいなどを、外に出そうとします。自分の内側の世界を、外側の世界の何かに表そうとします。それが表現です。 表現は、見えない心の世界を、見えるもの世界に置き換えようとする営みです。	・コミュニケーションの手段 ・創造性 ・生活の中での表現 ・生活の中からの表現
8 村谷 哲二	○			表現ということは、簡単にいうならば「あらわす」とか「しめす」ということである。 …表現は、主体的に表現しようとする者が、表現しようとする内容を、表現したい方法・手段によって外に表すものである。	・あらわす ・まね
9 皆本二三江			○	表現とは、感じたことや考えたことを言語や、身ぶり・表情、声や音、形や色などを通して伝達し合うことである。	
10		○		子どもの表現は子どもの心そのものである…子どもは、直接、表情や動きで表現するので、身体のごきは子どもにとって重要な表現の手段である。	・模倣
11 浜中 康子	○			一般に、感情と身体的な活動との間に意図的な関連のあるものを「表現」。	
12 大沢功一郎			○	…あらゆる場面において子どもたちがそこに存在することが、まさに表現であり、パフォーマンスなのです。子どもたちのみならず、すべての人々は常にどこかに存在し、何らかの表現活動を継続し続けています。	・パフォーマンス ・感動体験 ・環境 ・イメージの蓄積 ・創造性
14 林 建造	○		○	表出とは心の吐き出し的行為ですし、表現の方は、心を意図的に外に表し、誰かに伝達しようという行為です。	・あらわれ ・あらわし ・つぶやき
15 中山佐知子	○		○	子どもの表現活動の特質 ①自然発生的な行為であり、流動的に変容していくものである。 ②主観的で感情的な表現が多く、その活動は子どもの欲求や個性の表れであり、流動的に変容していくものである。 ③表現活動の過程そのものが楽しみであり、目的でもある。 ④一人ひとりの子どもの総合的な育ちに支えられ、それを反映しているものである。	・エネルギーの放出 ・感情的交流 ・主観的 ・感情的
16 藤江 充	○	○	○	一口に「表現」といっても様々である。ことばで話す、文章を書く、絵を描く、歌をうたう、楽器を演奏する、身ぶりを示す、眉をしかめて表情をつくる、さらに服装や持ち物の色やデザインを選ぶことなども表現の1つである。	・メッセージ ・模倣 ・エネルギー ・感受力 ・イメージ ・素材

栗原 泰子

No. 執筆者	表出 表現	感性 表現	コミュニ ケーション	「表現」についての記述	その他のキーワード
16 藤江 充	○	○	○	一口に「表現」といっても様々である。ことばで話す、文章を書く、絵を描く、歌をうたう、楽器を演奏する、身ぶりをする、眉をしかめて表情をつくる、さらに服装や持ち物の色やデザインを選ぶことなども表現の1つである。	・メッセージ ・模倣 ・エネルギー ・感受力 ・イメージ ・素材
17 岡田 陽	○	○	○	表現するということは、人が生きていくために必要な基本課題の1つである。	・プロデュース ・イメージ・外化
18 須藤 鶴子	○		○	乳幼児は次第に、自分で自分らしいからだの動かし方や言葉を創り出して、自己表現ができるようになります。その過程の中で、幼児自身は自然の表出を修正したり、葛藤し、挫折しては、よい表し方を見出して、喜びを味わい、満足するなど、体験を通しながら、心が育ちからだが育っていきます。	・感動 ・模倣
19 荒木 紫乃			○	人間は、生まれると目や耳や肌など（五感）を通して様々な刺激を受け、そして身体は、それらに対して反応をします。我々は、この外側に現れた行為（反応）を表現として受けとめることができます。	・知覚→反応 ・認知→表現
21 大場 牧夫	○		○	人間として存在すること自体を広い意味で「表現」とします。	・「あrawし」

われるものである、ととらえている。このとらえ方は多くの人たちに共通してみられるものである。ここでは、「表出」と「表現」を行為の主体の意識の持ち方による差異として捉えていることがうかがえる。表1のNo. 1, No. 6の黒川の記述をみると、「表現というのは、自分の内部にあるものを外部に表し出すこと」「表現は、見えない心の世界を、見えるものの世界に置き換えようとする営み」というような記述である。これは、行為者の思いを中心にその表現という行為をみている立場であるといえる。これに対して林は、表1のNo. 3, No. 14に示したように、表現を「うちなる思いを描き、それらを目標として外に表すという目的的な活動」あるいは「心を意図的に外に表し」というように、その表現という行為を目的のあるもの意図性のあるものというとらえ方をしている。また、No. 17の岡田やNo. 21の大場のように、表現が人間にとっての「基本課題」であるとしたり、「人間として存在すること自体」であるというようにとらえ方をしている立場もある。以上のように、表現を行為の1つの層としてとらえる場合においても、そのとらえ方の視点の置き方で「表現」の定義は以上のような多少の違いが生じてくる。しかし、全体的にいえば、表現はあくまでも行為として表れるものである。そして、この表現と表出の関連について、例えば黒川は、乳児期には「表出」に依存しているが、その後「表現」をするようになるというように、発達段階からとらえ、「表現」の前に「表出」があるとしている。³⁾つまり、行為としての表現に至る過程の中に表出するという過程があるという見方である。

また藤江 (No. 16) は、「表現は様々である」として、その表現の方法について具体的に例

を挙げてのべている。そして、この「表現」について、「『表出』と『再現』が相互に作用し合
って1つの『表現』をつくっていくと考えられる」としている。⁴⁾この考え方は、行為として
「表現」をとらえるのみではなく、過程として「表現」をとらえるとらえ方であるといえる。
つまり行為の主体の意識の持ち方よりも、その行為そのものの展開過程に注目して表現をとら
えているのである。

以上のようにそのとらえ方に多少の差異はあるが、「表出」と「表現」は、明らかにその概
念が異なるとらえられており、表出が表現の前段階のものであるとしたり、表現の発現過程
に表出があるとしたりしていることがわかる。どちらにしても、表出の方が原初的な概念のよ
うであり、幼児にとっても、表出は自分自身で表現を楽しんでいる際に出現するものととらえ
てもよいであろう。また「幼稚園教育要領」の領域「表現」のねらいでは、「(2) 感じたこと
や考えたことを様々な方法で表現しようとする。(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な
表現を楽しむ。」という事柄が設定されている。したがって幼児の表現的な活動を見ていく場
合には、それが表出と表現のどちらの方に幼児の興味・関心があるのか、行為の中でそのどち
らが現れているのかについて読みとっていくことが必要となるであろう。

(2) 「感性」と「表現」

—領域「表現」の基本的な考え方—

「幼稚園教育要領」の中で、領域「表現」について、「この領域は、豊かな感性を育て、感じ
たことや考えたことを表現する意欲を養い、創造性を豊かにする観点から示したものである。⁵⁾
の記述されているように、表現をする原動力ともいべきものを「感性」と位置付けている。
そして幼稚園教育においては、その「感性」を豊かに育てることによって、幼児が「表現」す
る意欲につながっていくとしているのである。

今回分析したテキストのうちこの視点が設定されているのは、5冊(29.4%)であった。

幼児の表現についてしてみると、領域を想定して作られたテキストの記述されている内容に
は、この「感性」と「表現」を視点として設定しているものが多い。この記述の前提となっ
ているものは、「感性」は、幼児の内面に育つものであり、それは個々の経験などにより様々
である、ということである。ここでは「表現」のために「感性」は必要不可欠なものであると捉
えられている。この感性について、藤江は、子どもが感じる場合の「感性」の意味を、①感覚、
②感受性、③価値認識の3つに分けてとらえている。⁶⁾それをまとめて表にしたものが表
2>である。

子どもの感性について、藤江は、「日常生活のなかで子どもの『感性』は、①～③が複雑に

表2 「感性」の3つの意味（藤江 1993）

①感覚	識別力 センサーとしての感覚。 自然との交流で磨かれる。
②感受性	洞察力（深さ） 感覚される表面の裏に ある内容をつかむ
③価値認識	直感力（豊かさ） 自然現象や人間の行為に 対する感情的な価値判断

からみあった現象として現れる。』⁷⁾としている。つまり、「感性」には3つの側面があり、それらが場面や状況に応じて使い分けられるということである。

多くのテキストは、「感性」について、「表現」へつながる元となる1つのものとしてとらえているのに対して、藤江はその意味に着目している点で他とは異なっている。しかし「感性」をいくつかの視点から切り取ってよみとっていこうという姿勢は、幼児教育においても必要となってくるものと思われる。

幼稚園の現場において幼児の表現活動を考える場合、この「感性」は重要であるという認識を教師は共通してもっている。しかしこの「感性」がいったいどのようなものなのか、幼児の感性をどのように育てていったらよいかについての具体的な方策については、あらためて検討されてはいないのが現状のようである。幼稚園教育要領においては、領域「表現」のねらいの中で「(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。」という事柄が設定されており、ねらいの最初にこの事柄があることから、やはり幼稚園教育要領においても、「感性」が「表現」へとつながっていくものという位置づけがなされていることがうかがえる。この「感性」については、理論的な探究が進められることにより、それと因果関係をもつと位置付けられている「表現」についても理論的に明らかになる糸口となっていくと思われる。今後このような方向でのアプローチが必要になってくると思われる。

(3) 「コミュニケーション」

—伝達過程として—

「表現」は、他の人に向けて何らかのメッセージを伝達するものであるという考え方が、今回分析したテキストのうち13冊（76.5%）にその記述がみられた。これは行為として「表現」をとらえるのではなく、「表現」を他の人とのコミュニケーションの手段としてとらえる

ものである。そこには何らかの伝達の意志が働き、伝えたいという気持ちから「表現」を行うということであり、「表現」そのものが目的ではなく、他の人とのコミュニケーションが目的となっているのである。「幼稚園教育要領」においては、領域「表現」の内容の中に「(3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。」としており、保育内容の中にもこのコミュニケーションのための表現活動が想定されていることがわかる。しかしここで述べられているのは、あくまでも「伝え合う楽しさを味わう」ことであり、できあがった何らかのものを友だち等に見せることを「表現」としているわけではない。つまり、自分が楽しいと思ったり感動したりしたことを、友だちにも伝えて一緒に楽しむことがその目的なのである。そして「表現」はそのための媒体であり、手段なのである。したがって、教師は幼児がコミュニケーションの手段として「表現している」状態を把握し、どれが幼児一人ひとりにとっての「表現」なのかを理解していく必要がある。友だちの名前を呼ぶこと1つをとりあげても、その声の大きさや抑揚、それに伴う身体の動きなどを観察することによって、それがその幼児にとっての「表現」なのだというような読みとり方も可能になってくるのである。そしてそのような幼児の言葉や身体表現などの1つ1つを「表現活動」として読みとっていくことが必要になってくると思われる。

(4) その他のキーワード

<表1>にその他のキーワードと思われるものを抽出した。「幼稚園教育要領」においては、「イメージ」という言葉も使われており、感性と表現をつなぐものとしてイメージが使われているようである。今回分析したテキストの記述の中にもこの「イメージ」という言葉がキーワードとしてあらわれてきている。子どもたちが生活の中で感じたことや考えたことをイメージとして蓄積し、そのイメージから表現をするというような構造がそこには、みられる。

また「表現」を「パフォーマンス」や「模倣」というようなキーワードからは、「表現」というよりも「再現」に近い把握の仕方を読みとることができる。表現芸術というジャンルでくくられている文化活動は、まさにこの模倣から始まり、パフォーマンスという活動で表されるものである。これらのキーワードの使用には、「表現」を自分の感じたことや考えたことを表すことでも、コミュニケーションの手段としてでもない、観客に見せるための「表現（再現）」を想定しているということができる。

幼児教育の現場においても、まとまった作品として活動を展開させていく場合には、このような模倣から始まり、作品として完成させるというような方向がみられる。このような状況は多くの幼稚園において、父兄を満足させることや新入園児の獲得につながるものとして重視

されることからみられるものである。幼児教育の経営的な現実問題としての必要からこういった活動が多くみられること自体が、幼児の表現活動を考えていく際の問題点にもつながっている。現実的な面から考えると、こういった幼児のパフォーマンスは、幼児自身のためではない面があるが、その中でどのように幼児自身が表現することを楽しんでいくのか、それを人に見せる楽しさや成就感を体験させていくのかは、教師の援助の方法にかかっていると思われる。

5. まとめ

今回分析してきたとらえ方の他にも、「表現」をさまざまな視点からとらえているものもあった。「表現」に関する共通のとらえ方を検討する上で、上記の3つは1つの切り口ともなるものであろう。幼稚園教育における「表現」を理論的に探究していく際には、これらの3つの視点に関して、援用可能な学問分野がある。例えば、芸術学、美学、音楽学、美術、社会学、認知心理学などである。

今回分析をしたテキストも、出版の年度が下るにしたがって、これらの理論的な記述が深まっていくという傾向がみられた。幼稚園教育について考えてみると、現場の幼児の状態から実証的に保育内容について分析、検討していくことも必要であるが、幼児の表現活動の背景にある、理論的な検討も必要になるべきであろう。これらのことについては、研究者もその重要性について認識しているし、論述の方向も理論的な検討に向かっていることも明らかになった。

最後に大場牧夫の「あらかの層」という図を引用することにする（図1参照）。

これは、幼稚園教育のみならず、人間にとっての表現を「あらか」という言葉を使って示し、その構造を図示したものである。幼児教育に至る前の段階の「不明瞭な表出行動」を基底において、そこから幼児教育における表出、表現活動を層としてとらえ、そのうえに学校教育段階における教科を設定し、最後にその上にくるものとして、文化のジャンルとして表現に関連するものを挙げている。この図で注目する所は、乳幼児期の表出、表現活動が大きな1つの山として描かれ、その山の頂上が3つに分かれていることである。ここで大場は表現活動の分化を表現していると考えられる。そして、その山とは全くつながりがなく学校教育における教科および文化のジャンルが設定されていることである。つまり、乳幼児期の表現は、あくまでも乳幼児期で1つのものとしてとらえるべきであり、それは学校教育の教科や文化における表現に関連するものとは別個のものであるということである。乳幼児の表現そのものをとらえていこうという大場の姿勢は、これからの幼稚園教育における「表現」をとらえていく際の手がかりを何らかの形で与えてくれるものと思われる。

保育に関するテキストにおける幼児の表現のとらえ方について

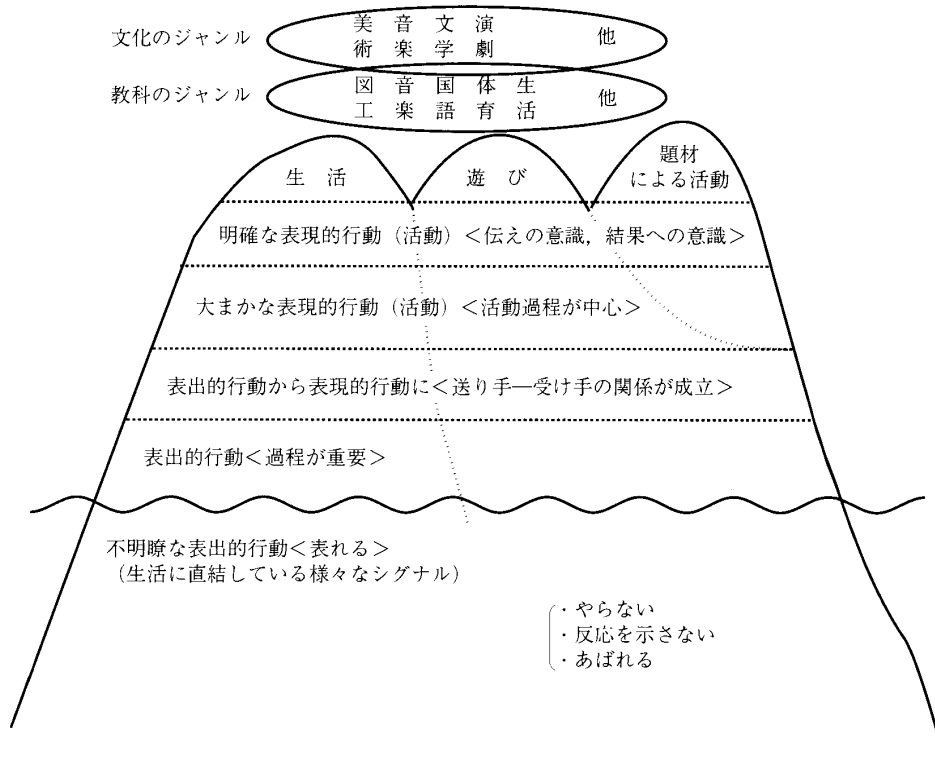


図1 「あらわしの層」(大場牧夫『表現原論』萌文書林：1996. 8. 8) p. 179

引用文献

- 1) 「学校教育法」第1条 [学校の範囲]
この法律で、学校とは、小学校、中学校、高等学校、大学、高等専門学校、盲学校、聾学校、養護学校及び幼稚園とする。
- 2) 栗原泰子「幼稚園教育における『表現』概念の検討」日本保育学会第50回大会論文集, pp. 730-731.
- 3) 黒川健一・小林美実編『保育内容 表現』建帛社, p. 3.
- 4) 藤江充・梅澤由紀子編『表現』福村出版, p. 11.
- 5) 「幼稚園教育要領」

表現

この領域は、豊かな感性を育て、感じたことや考えたことを表現する意欲を養い、創造性を豊かにする観点から示したものである。

1. ねらい

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えたことを様々な方法で表現しようとする。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

2. 内容

- (1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気づいたり楽しんだりする。

- (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり自由にかいたりつくったりする。
- (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズムを使ったりする楽しさを味わう。
- (7) かいたりつくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり飾ったりする。
- (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現し、演じて遊ぶ楽しさを味わう。

3. 留意事項

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 豊かな感性は、日常生活の中で楽しいもの、優れたもの、心に残るような出来事に会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し様々に表現することを通して養われるようにすること。
 - (2) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ表現する意欲を十分に発揮させることができるような材料や用具などを適切に整えること。
 - (3) 幼児が自分の気持ちや考えを素朴に表現することを大切にし、生活と遊離した特定の技能を身につけさせるための偏った指導を行うことのないようにすること。
- 6) 藤江他編，前掲書，p. 17.
7) 前掲書，p. 18.